



# 素顔の告白



麵 平良

## 発見

---

ここに一冊の書記がある。私はこの書記の持ち主である、兵藤 福次郎の最近出版した本に関わったのだが、兵藤氏亡き後、この書記が発見された。

彼は稀代の天才作家、永井橋の書生であり、彼曰く愛人でもあったという。永井氏亡き後、兵藤氏は所謂暴露本「告白～永井橋」を我が出版社から出し、ちょっとした騒ぎになった事がある。しかし我が社から出版し、私もそれに関わっていたのにこのような事を言うのも変だが、兵藤氏には虚言癖や妄想癖がかなりあり、永井氏以外の存命の登場人物も首を傾げる事が多く、この暴露本はどこまで信じていいのだろうか？というのが本当のところであった。

## 書記の内容

---

私の母は賭博の元締めで、毎日派手な身なりをして庶民相手の青空賭博を開いていた。違法な仕事をする自分を守ってくれる男と結びつき、4人の父親の違う子を産んだ。

顔も知らぬ、私の父が刑事であったと聞いた時は、自分は世間から見てまともな肩書の人間の血が通っていると思ひ嬉しさと、他の兄弟姉妹への優越感を感じたのだが、それほど私は世間の評価、肩書等に敏感である。

そんな私だから、同性愛者という性癖も当然恥に思っている。同性愛者への差別、という言葉は、当然同性愛者が社会において差別され易いから言われるのであり、社会において差別され易いという事は、社会の大多数の人間に受け入れられ難いという事であろう。

私には種違いの弟がいるが、私同様の同性愛者で、私は彼を殺したいほど憎んだ時期があった。どういうわけか、弟の太郎は自分の性癖を全く気にせず、内密にもしておらず、思いを寄せる男と堂々と付き合っていたりと、性癖を周知のものとしていた。

私はまるで、自分の性癖が暴かれるようないたたまれない気持ちになり、それであれほど憎んだのかもしれない。

私が永井橋という作家に興味を持ったのは、19歳で大学に通うために、単身上京した時であった。

その頃、実母は小料理屋を営んでおり、私に学費を出して「大学へ行ってはどうか」と勧めてくれたのである。

被害者意識の強い私はそれを、私が産まれてこの方叔母に預けっぱなしのほったらかしであった事への罪悪感かと考えつつ、以前から郷里から遠く離れたいとこの思いや、華やかな場所への憧れもあり、その申し出を受ける事にしたのだ。

しかし実際の東京は、そんなに甘くはなかった。毎日生活費を稼ぐためにアルバイトをした後、私と同じような貧乏学生と共に寮で雑魚寝する日々。

それも、人間関係が充実していれば楽しかったかもしれない。しかし寮内等では女に関する話ば

かりであった。同性愛者でありつつ、その性癖を隠している私にはどう受け答えしていいのかわからなかったと言え、おそらく性癖を言い訳にしている事になるのだろうか。

そう、単に私には社交性が無かったのだ。例え異性愛者であったとしても、結果は同じだっただろう。それを近い将来に証明されるとは、この時はまだ思いもよらなかった。

そんな毎日の中、何の魔が差したのか、書店で一冊の本を手に取り何気なく立ち読みしてみたら、その内容がなんと、私と同じ男性同性愛者が少年時代からの自分を振り返るという内容の話で、私はぐいぐい引き込まれ、その時以来、その小説を書いた作家の作品をリスペクトするようになった。

私は自分の孤独を、同性愛者という性癖のためと思い込んでいた。実際は、原因は違うところにあったというのに、それを直視する事が辛くて目を逸らしていたのだ。

とにかく、その頃の私は同性愛者の集団というか関わりの中へ入る事で、自らの孤独を解消しようとしていた。

永井橋は、異性愛者を自称していたが、私は同性愛者もしくはその気ありと半場確信していた。そこであるアイデアが思い浮かび、永井氏にファンレターを送りつけた。

「ルマンというゲイバーは実際に存在するのですか？もし存在するのなら、興味があるので教えてください。」

永井氏の作品を読んでいて、なんとなく、永井氏は知的な青年、文学青年等は好きではないだろう、と予想していたのでこういう内容にしておいた。さらに、ゲイバーに興味があるという点で、同性愛者である可能性を十分に匂わせておいたのだ。

このアイデアは功を制し、私はいきなり永井橋氏に直接、個人的に会う事となった。

白状すると、私には永井氏の作品や芸術、文学等に対する執着は皆無と言って良く、ただ、当時日本中から天才と称賛される大作家を通じて、東京の華やかな世界に関わりを持つチャンスが欲しかっただけである。

また、同性愛者もしくはその傾向があると思われる永井氏に、そういう意味で気に入られたら、きっと良い思いができる。そんな下心もあった。

なので、永井氏に初めて会う時は本当に緊張していた。絶対に気に入られなければ、せっかく見つけたこのチャンス、逃してはなるまいと必死であった。

貧乏学生にできる、精一杯の正装で待ち合わせ場所の喫茶店で、緊張しながら待っていると、永井橋が現れた。これが私と永井さんの初対面である。

永井さんは正装の私と違い、ラフな普段着だったが、当時流行の服装で全体的にあか抜けていた。顔は十人並で、体はどちらかと言えば貧弱で小柄だった。

緊張している私に対して、非常にリラックスしたフレンドリーな態度で、かといって緊張している私に気を使うわけでもなかった。いや、ひよっとしたら気を使っていたのかもしれないが、それを窺わせない非常に自然な態度であった。

「ルマンという店自体は無いんだけど、モデルにした店ならあるんだ。そのうち連れてってあげるよ。」

元タルマンという店に興味があったわけではなく、永井さんの気を引きたかっただけなので、そんな事はどうでもよかったが、「そのうち」という台詞から、どうやら永井さんは私との繋がりをこれっきりにほしくないつもりらしい、という希望を抱いた。

その後、しばらく雑談していたが、永井さんは非常に話上手で私の緊張が解けていくのにそれほど時間はかからなかった。ものの短時間で、私は永井さんを好きになった。どういう種類の好き

かは分からないが、性的な意味でない事は確かだった。男性同性愛者だからといって、男なら誰でも良いというわけではなく、好みがある。

永井さんは、文学の才能だけでなく、相手に好感を抱かせる、人間的魅力にも富む人であった。

しかし私の方と言えば、相変わらず、興味深い受け答えなんてできず、我ながら面白味の無い男だと嫌になるほどであった。緊張していようと、していなかろうと、相手の性癖がどうであろうと、私は社交性の無い、人間的魅力の乏しい奴なのだ。もちろん、永井さんレベルどころか、並の文学的才能も無い。

そんな私相手にも、永井さんは全く迷惑そうな素振りすら見せず、全く自然体で好意を持って接してくれた。そんな彼だからこそ、好かれるのだろう。

私など、好意を抱いた相手にすら何もできやしない。

永井さんには、自分の性癖を知る親友とも言える間柄の人が居る。加藤さんといって、飲食店を経営している。その店は異性愛者も普通に來る、普通の店なのだが、経営者の加藤さんがゲイなので、同じような人達が集う事も少なくなかった。

永井さんは私を加藤さんに紹介し、よく加藤さんの店で飲食をしたものだった。加藤さんもまた、社交的な人で、人見知り激しく陰気な私を上手く輪の中に入れてくれていた。

私は毎日のように、大学にもろくに行かず永井さんの所に入り浸っていた。永井さんは私に3万の小遣いを渡す口実のため、簡単な仕事を与えていた。働かずに、金を貰うという愛人生活をするような人間になってはいけないとの配慮だったらしい。

私はそんな風に、自分を心配してくれる事が嬉しかった。ペットのような愛玩具ではなく、社会生活を営む人間として重んじられている気がしたから。

簡単な仕事をするだけで、小遣いを貰え、良い飯をご馳走になり、映画を見に行った事もある。以前の自分からは想像もつかない、至福の贅沢三昧の日々。

私は、所謂暴露本の「告白～永井橋」に「まるで農民から殿さまの側近にでも召し抱えられた気分だった」と厚かましく書いていたが、側近というのは社会的な関わりの中での生産的な活動に対して、欠かせない能力を発揮できるからこそ成り立つ表現であり、あっても無くても良いような形だけの仕事をして小遣いを貰う私は、愛人と言った方が正確なのかもしれない。

いや、より正確に言えば愛人ですらなかった。

永井さんは、珍しい類の手紙を出してきた青年の私を、一時珍しがり、面白いと興味を持って可愛がっていたに過ぎず、要はペット、もしくは野良犬に気まぐれで餌をやったりする、という表現が最も似つかわしい気がする。

野良犬でも、もっと気に入られれば、飼ってもらえる。当時の私は、なんとか永井さんに飼ってもらおうと必死であった。しかし私には結局、永井さんをそこまで惹きつけるだけの魅力は無かったのである。

ある日、某作家が亡くなった時の事、永井さんは葬儀へ行く支度をしながら

「何であんな下らない作家の葬式に行かなきゃならないんだ」

とぼやいていた事がある。

私は実は、その作家の作品は庶民的な感じが良いなど以前から思っており、愛読していたので、その作家を好きだと永井さんに言った事が無くて良かったと思った。

言えばよかったのだ。でも私の言い方で言えば、きっと永井さんは気を悪くしただろう。

私には、相手とは違う自分の意見を、相手の気分を害させずに伝える能力が欠けている。同じ意見の場合ですら、相手を不快にさせる事があるくらいだ。

このように、私は相手の気分を良くさせる事が苦手である。どんなにおべっかを使って機嫌を取ろうとしても、わざとらしいおべっかになってしまい、気に入られるという事が無い。

理由はこの歳になって、ようやく分かってきた。私が人間を愛していないからだ。人間嫌いだから、その嫌悪が愛の無い言動として自然と表れるのだろう。

愛の無い言動は、どんなに理に適っていても魅力の無いものだ。私は魅力の無い言動しかとれぬ、魅力の無い人間であった。

しかし、私が本当に至福に感じていたのは、実は経済的な贅沢ではなく、人との繋がり・人間関係の充実にあった。むしろ、経済的な贅沢は無くても十分だったと本心から言える。

楽しい会話、皆で囲む食事、私はだんだんよく笑うようになり、冗談も普通に言うようになった。自分でも以前より明るくなった事が分かった。それでも私の根本、人間嫌いは相変わらずなため、魅力の無い人間である事には変わりなかったのだが。

永井さんが、私を書生として永井さんのご両親に紹介するまで時間はかからなかった。

この永井さんの行動から、私はどうやら野良犬から飼い犬に昇格できたらしいと、内心小躍りしていた。

何でも、永井さんは今まで書生を持った事が無いらしいのだ。私はそれだけ気に入られているのでは、永井さんに強い影響力を持つ愛人ぐらいになれるのかもしれないという期待を大いに抱いた。

そこは東京の高級住宅街にある、洋風建築の館で、永井さんはまだその頃独身で、ご両親と同居していた。

父親の健一さんは官僚で、その頃は既に退職していた。ちなみに永井さんも作家になる前は官僚であった事は皆も知る通りである。

健一さんは典型的なオールドワイズマンで、温厚な紳士で、人を指導する事が好きらしく、育ちの悪さからか食べ方等のマナーが成っていない私を、「箸の持ち方は、こうだ。」等、喜んで指導していた。



母親の静子さんもグレートマザータイプの人で、「福次郎さん、これ召し上がって」「福次郎さん、ご苦労様」等としょっちゅう優しい言葉をかけ、手料理を始めとして真心の心遣いをしてくれた。

私はこの家で、しょっちゅう食事をご馳走になり、泊まったりして健一さんや静子さんとの疑似親子を楽しんでいた。ひょっとしたら永井さんよりも、この夫妻への執着の方が強いかもしれない。

父親の顔も知らず、母親からは放っておかれた私は親の愛情に飢えていた。

「告白」でも他の作品でも、「私は自分の境遇を不幸とは思っていない」と断言しているが、それは自分で自分の境遇を憐れんで見せる事の見苦しさを感じていたからで、実際心の底では、自分の境遇を憐れんでいたし、母を、両親を憎んでいた。

しかしそれは、恥ずべきことと知っていたので、世間には隠そうとしていたのだ。

とにかくそういう訳で、私は永井さんではなく自分がこの夫妻の実子であったらと常に思っていた。しかし、どんなに疑似親子を楽しんでも、私はやはりよその子でしかなく、夫妻は実子の永井橋を溺愛していた。

私は、才能だけでなく、愛してくれる両親も、他人を引き寄せる人間的魅力、私が持つておらず、欲しくて仕方がないものを当たり前のように享受する永井さんに対して、暗い嫉妬を抱くようになった。

嫉妬という現象は、相手を自分と対等もしくは自分より劣るとの考えから生じると思う。

私に永井さんへの嫉妬が生じたのは、同じ同性愛者であったからだ。私には、同性愛者は異性愛者よりも劣るという認識が、ある。

そんな、私と同じ同性愛者という劣等種族のくせに、華やかな世界でちやほやされて、愛されているなんて、と。こう思うわけである。

今そんな事を言えば、いや当時言っても馬鹿にされたであろう。こんな、同性愛者への認識が誤りである事は、私も頭では知識として知っている。

性癖だけではなく、私には自分について自虐的というか卑屈になり易いところがあるのだが、それは自らを虐めたいわけではなく、むしろ自らを守るための自虐である。私は自虐する事で、世間という名の神に弁解しているのだ。世間が認め得ない性癖について、私はこんなに罪悪感を抱いて苦しんでいます、悩んでいます。だから許してくれたっていいじゃありませんか、と。

しかしそれだけではなく、自らを汚らわしいというかろくでもない存在と認識し、嫌悪しているところも確かにあった。私は自分の声を録音テープ等で聞いたり、聞かれたり、また鏡なんかで自分の姿を明確に見る事が非常に苦痛なのだが、それは自らの本性や内面から目を逸らしている、逸らさねばならぬほどの醜さを知っているが故なのかもしれない。

私は直視できぬほど嫌悪する自分を、なぜそれでも守って大切にしようとするのか、自分でも不思議である。

後年、永井さんの友人の書生が、永井さん宅について、こんな記述をしているのを読んで、驚いた。あの、高級住宅街にある永井さん宅は、昔首つりのあったような格安物件であり、永井家の精一杯の見栄だったという。もし、息子の永井橋さんの作品が売れなければ、定年退職している健一さんの年金以外に収入は無く、静子さんは健一さんとの離婚までかつて考えていたそうなのだ。

私はその記述を読んで、自分と同じ同性愛者のくせに全てに恵まれていると嫉妬していた相手が、実はそうでもなかったのだ、と密かに暗い喜びを感じていた。

永井さんと関係を持ったのは、会ってから5回目くらいの時であった。

場所はホテルで、私がベッドに寝そべると、私より体の小さな裸の永井さんが、まるで獣のように覆いかぶさり、事を終える。

私は実は性交渉が初めてで、何か変な行動をして永井さんに気に入られなくなってはいけない、との緊張から何もできずマグロ状態で、性器も反応しなかった。そのため、最中とその後は、永井さんに愛想をつかされたのではと不安でいっぱいだった。

しかし、事を終えた後も、次の日の朝も、永井さんは上機嫌であったので、私は一先ず胸をなで

おろした。

ちなみに、この私の何の反応も無い状態での永井さんとの性行為は、この後も変わり無かった。

そのうち永井さんも、さすがに気にし始めていた。なので私も、このままでは永井さんに愛想を尽かされるのでは、と不安に思い始めるようになる。床の上で、永井さんが気に入るような行動をしたかったが、私は床の上ですらコミュニケーション下手であり、とんちんかんな行動しかできなかつた。せめて性器に反応して欲しかった。そして床で永井さんに気に入られ、仕事を手伝う秘書のような、欠かせない存在となり、東京の華やかな世界の一員として確固たる地位を築きたい、健一さんや静子さん夫婦の義息子としてますます可愛がられたい。

愚かで浅はかな私である。気が利かず、意志の疎通も下手で、何より相手への何の愛情も持たない自らの事しか考えない私が、そのような欠かせない存在となる仕事ができるはずが無かつたというのに。

話を戻そう。そしてホテルのルームサービスの朝食だが、柔らかいパン、卵に、分厚いバターやジャム等の豪勢な朝食は、一日の食事がコッペパン一個でもおかしくない貧乏学生には驚愕するものであつた。

私があまりにガツガツしているので、元々小食な永井さんは「僕の方もあげるよ」と言ってくれたものだから、私はバターもジャムもあるだけ全てパンにつけて平らげた。

そんな私の様子を見る永井さんの表情は、非常に穏やかで余裕のある笑みを浮かべていた。

きっと、卑しい貧乏人だと見下していたのだろう、と思った。実際はそんな事は無く、ただの私の思い込みだったかもしれない。しかし被害者意識の強い私は、その思い込みを完全に消す事ができず、いつまでも燻り続け、「今に見てろよ、いつか俺の方が見下してやる」というような逆恨みを密かに抱くようになった。

しかしどうやって見返すというのだろうか？才能を始めとして、私には永井さんより勝る点が見当たらない。だからせめて、永井さんに強く執着されたい、愛されたい。けれども私の方では永井さんを欠片も愛さず、執着もしないのだ。

しかし実際は、逆であつた。私は永井さんを実に愛してはいなかつたが、暗い執着は強く抱いていた。

永井さんの親しみやすい、共に居る者を楽しませる感化力に自分は当然、魅了されており、それによる、永井さんに気に入られたい、好かれたいとの思いがあったが、同時にその思いを悟られたくないとも思っていた。理由は、その感情に付け込まれて裏切られる事が怖かったからである。私は人間を嫌うが故に、恐れてもいるらしい。

永井さんという人間への執着を隠すため、私は永井さんの与える経済的な豊かさにしか執着していないとのポーズを、無意識にとるようになっていた。それが逆に相手を遠ざける事になると、愚かで臆病な私には分からなかったのだ。

朝食後、永井さんの腕時計が見当たらず、ちょっとした騒ぎになった。永井さんはホテルのボーイと共に探していたのだが、私は冷たくそれを眺めているだけであった。

少し前の私ならば、永井さんの気を惹くため、ゴミやほこりまみれになる事も構わず必死で探したであろう。

しかし愚かな私は、永井さんと床を共にした事から、彼の暗い秘密を知った気でいたので、また永井さんがすっかり自分を気に入って、自分は愛人としてかなり強い影響力を持った気がしたため、必要以上の優越感を抱き、馬鹿にしてもいた。

このように、私は仲良くしている相手が目の前で困っていても、こんな態度と考えを抱くような人間である。我ながら自らの冷たさに呆れると同時に、なぜ自分が人に好かれなかが分かる気がする。

永井さんが、私を「ルマン」のモデルになった店へ連れて行ってくれたのは、それから数日後ぐらいであったと思う。

元々「ルマン」等に興味は無かった上に、その店での経験は私にとっては不愉快でしかなかった。

シャンデリアや絨毯、ソファ等のある華やかな店内では、ボーイ達はこぞって永井さんに気に入られようとちやほやしたり、媚びたりしており、永井さんの連れで、貧乏学生でしかない私は邪魔者として退かされ孤立していた。接客のプロ達に対して、コミュニケーション下手の私には

立つ瀬が無く、惨めで寂しく、また永井さんが自分の代わりをここで見つけるのでは、と不安でもあった。そうなれば私の事などすっかり忘れてしまうだろう。

思い上がっていた私の気持ちは急激に萎み、それ以降は常に、永井さんに飽きられる事を恐れつつ、それを表に出す事に私の脆い自尊心は耐えられないので、外面では永井さんの好意を無下にするような傲慢な態度をとっていた。同時に、どうすればいいのか分からない、どのような言動で相手が喜ぶのか、私には皆目見当もつかないというのも大きな理由ではあった。要は人の気持ちが分からぬ人間という事である。

永井さんは、毎年伊豆で過ごすそうで、その夏は私も連れて行ってくれた。豪勢な食事を永井さんと楽しく頂き、昼間はもちろん海で泳いだ。社交的な永井さんは、その旅館に泊まる他の客達と早々に顔見知りになっており、夜は彼らと歓談したりしていた。私は彼らの身なりや言葉等から、私とは相当に違う、永井さんのような育ちの良さや豊かさを感じ、何か育ちの悪さや貧しさを匂わせる発言をして、恥をかく事を恐れて何も言えず苦痛でしかなかったが。

私は海へ泳ぎに行く時、永井さんには何も断りをせず勝手に一人で行っていた。すると後から永井さんも砂浜に現れ、海パン姿になる。

永井さんは何も不満を言わず、不満そうな素振りすら見られなかった。実際、そこまで気にしていなかったのかもしれない。

しかし私は、今から考えれば「永井さん、一緒に海に行きましょう」とでも言えば良かったと後悔している。あの頃も、そういう事をしたかったのだが、一体どんな言動をとればいいのか皆目分からず、結局ぶっきらぼうな言動に至ってしまった。

あの頃の私は、そんな初歩的なコミュニケーションすらとることができなかった。

だから、この伊豆でとうとう永井さんにも愛想を尽かされてしまったのである。

私の受け答えの不味さが原因であった。どんな受け答えをしたのかについて、この誰も読む者が居ないであろう書記にすら、書くことができない。それくらい私には思い出すのも辛く、恥ずかしいという事である。

私は自分のその言葉が相手を傷つけるなどと、永井さんが機嫌を損ねた後も分からなかった。永井さんはちょっと神経質すぎるんじゃないか、とすら、今まで散々寛容に接してもらっていたのに、思ったくらいである。

しかし後で、他の人間から同じ言葉を言われた時、かなり腹が立った。それで初めて自分が非常に失礼な言い方をした事に気付いたのである。

しかしこの時はまだ、機嫌を損ねた永井さんに対して逆に腹を立てている状態であった。旅館での荷造りの時も、永井さんは大変そうだったが、私は冷ややかに眺めているだけで、帰宅途中も永井さんが喋らないので、私も一言も喋らなかった。

私は永井さんを通じて、東京の華やかな世界に繋がりたいのだから、機嫌を直してもらおうと、許しを乞うべきであると、知ってはいたのだが、初歩的なコミュニケーションすらとれない私に、壊れた関係を修復する能力などあるはずがない。

何をどうしていいのかわからぬ私は、永井さんの所へ行くのを止め、ある日金を借りるため加藤さん宅へ伺った。

加藤さんは金を貸すと同時に、永井さんとの事についても色々聞いてくれた。

「帰り道もずっと、何も喋らなかったそうだね。その後も永井さんに会いに行っていないとか...永井さんね、気にしてたよ。あなたが何を考えているのか、さっぱり分からないって。」

ああ...ただ。私は内心、暗く呟いた。「何を考えているのかさっぱり分からない」他の場所でも何度か言われた事がある。私は相手に、自分の意思や意見を上手く伝える事ができない。語彙力が乏しく、日本語が下手なのか、自分本位でしか話すことができないからか、そのどちらもか...この性質は、今なお抱えているが、この頃は今よりもっと酷かった。

加藤さんは「永井さんは、まだ十分にあなたを許しているよ。明日にでも会いに行行って謝ってきなさいよ。」と勧めてくれたが、私は行かなかった。

相変わらず腹を立てていたのではない。怖かったのだ。前にも書いたように、私は人間を恐れている。だから永井さんから逃げ、自分の世界に閉じ籠った。

永井さんという生活の糧を失った私は、加藤さんの紹介により、あるゲイバーのボーイとして雇われたが、一日で洗い場に回された。

理由は今まで散々書いた、私の対人関係スキルの無さが原因で、接客どころかボーイ間の人間関係すら上手くいかなかった。私にとっても接客は苦痛でしかなかったので、人とほとんど関わる必要の無い洗い場の仕事に回してもらえてほっとした。

洗い物に追われ、食事をとる暇も無く、カウンターの内側でしゃがみ込んで、店から支給される食事を慌ただしくとっていた。その食事はマスターの妻が作る弁当なのだが、静子さんの手料理とは比べものにならない、菜と飯だけの貧しいものであり、しょっちゅう空腹を抱えていたが、それでもボーイとしての接客よりは随分気持ちが楽だった。

しかし結局、この仕事も10日程しか続かなかった。

理由はしんどかったからである。私は病弱ではないが、疲れやすく、体力があまり無い。これは虚弱と言うのだろうか？

しかし、永井さんと違い、体格が貧弱ではなく、丈夫そうに見えるので、世間の皆からは根気が無いだけ、と見なされる事が多い。実際その通りなのかもしれない。しかし根気というものを身に着けるにはどうすればいいのかも分からなかった。

「頑張って目の前にある仕事をすればいい」と世間は言うのかもしれない。しかしそもそも「頑張る」という事自体が根気があってこそできる事なので、根気の無い人間には不可能なはずだ。

しかし私は別の事柄において、「根気を持ってやってる」と言われた事がある。つまり私には根気があるという事だ。

根気を持ってできる相手とそうでない相手があることになり、それは私だけでなく人間は皆その様であるはずだ。そして、何に根気を持つべきか否かについては、世間、つまり人口の大多数によって決められる。

そして世間という名の神が定めた事柄に根気を持って取り組めない場合、社会不適合者という事になるのだろう。

洗い場のすぐ上で、青年たちが接客している。その華やかな世界に、私の居場所は無かった。そして裏舞台にすらも。私は居場所が欲しかった。確実にそこに所属していると確信する事のできる、安心できる居場所が。

その頃の私は、出口を失ったような不安と焦燥を抱え、お先真っ暗だった。

永井さんを避けるようになってから、普通に会っていた時以上に、永井さんの著書を気にかけて読み漁るようになった。

私は永井さんを愛してはいなかったが、強く執着していたので、無関心ではいられず情けない話だが未練たらたらであったのだ。

暗い内容の話があれば、自分との破局が影響を及ぼしているのではと深読みしたり、また、「次郎」という名の男が登場すれば、それは自分をモデルにしてるに違いないと考えた。

ある時、永井さんの小説内の「次郎」という登場人物が、卑しい吝嗇化の良い所無しな人物として書かれていたのを目にして、永井さんを避けるようになった私を恨んでの事に違いないと勝手に思い、一人喜んでいた事もある。私は忘れられておらず、これほど永井さんの心に強い影響力を持っていたのだと。

馬鹿な話である。加藤さんは、「永井さんは私を許している」と言っていたではないか。「許す」という事は、その相手に囚われていないという事だ。おまけに私と別れた後、他の男の愛人もいたと聞いた。

しかし私は、私が囚われていると同様、いやそれ以上に、私に囚われていてほしかった。そうであれば、私一人、置いてけぼりの孤独ではないか。

私は、私に囚われず、早々に新しい相手を見つけた永井さんを密に恨み、憎んだ。



永井さんが仕事のため、アメリカへ渡ったと聞き、私はのこのこと健一さん、静子さん夫妻の元へ足を運んだ。

もはや永井さんの心に、私の居場所を見出せる自信は無かったが、この夫妻の元にはまだ見出せる気がしていたから。

不安に思いながら訪れたが、夫妻は温かく迎えてくれた。健一さんの雑用を手伝い、夕食を頂いてから帰宅する。泊まる事もしよつちゅうだった。私はこの夫妻に溺愛される永井さんに嫉妬していたので、永井さんが居ない事で逆にいい気分だった。

このまま永井さんが帰宅せず、自分がこの2人の息子のような形になればいいのにと考えた。

しかし永井さんが帰宅する前に、私は福島県の学校に勤めながら卒業論文を書くことになり、2人にその旨お伝えして東京を出た。

帰宅した永井さんは、私がお邪魔していた事を知り、どう思っただろうかと考える。不快に感じただろうか？不快だろうと愉快だろうと何でも良い。何も思われないなんて惨めだ。

愉快よりは不快の方が、感じて欲しかった。そちらの方が、より強い影響力を持っている気がするから。

## 恥の多い生涯

---

福島県にある、私が勤めた学校は山奥にある生徒数の少ない学校で、下宿先も寂れた旅館であった。その旅館には少年が一人、働いていて、彼は母子家庭で母親は他所で働いているのだが、ある日母親に男ができて、彼は捨てられた形となった。そのため、夜一人で泣いているのを見かけたのがきっかけで親しくなったのだ。

私はその少年に、形容しがたい下心を抱き、勉強を教えてあげると言って部屋に入れるようになった。勉強を教えながら、徐々に体に触れていき、要は性的悪戯をするようになる。

身寄りの無い、何も知らぬ子供である事が私を安心させ、私の体は反応した。少年の顔は引きつっており、不快を感じているようだったが、それでも彼の知る世界で優しくしてくれるのは私だけなので、拒絶できないだろうと、私は安心していた。

この少年の心に、生涯抱えるであろう傷を残す事になると、私は知っていたが、それ以上に、この醜悪な行為によって自分の自尊心を取り戻せるとの考えの方が大きかった。

そして私は、自分は性行為が可能であると確信し、自尊心を取り戻したつもりでいた。醜悪な行為により取り戻す自尊心に何の価値があるのだろうか。そもそも自尊心を取り戻してなどいなかった。その後も私は相変わらず、傷つきやすく脆い自尊心のままだったのだから。

私も母に捨てられた、というのは被害者意識の強い言い方で、あまり使いたくないが、そうでなくとも、私自身はそのように考えていた。

少年が自分の境遇と似ていると考え、自分がして欲しかったような事をしてやる気にならなかったのは、なぜなのだろう。

それ以来、私は彼と同じような、身寄りが無く、立場の弱い、何も分からないような少年ばかりを狙っては、このような犯行に及んでいた。

そして「私が少年達に本気で恋をしていたから、その気持ちに通じて世間に私の行為が露呈しなかったのだ」と、自分の憎むべき醜悪な犯行を美化する事で目を逸らし続けた。

私は少年趣味なわけではない。例えば、ゲイバー等へ行けば、デブ専の少年達が、当時肥満であった私と喜んで関係を持ちたがったが、私は本当に嬉しくなかった。

少年達は私の太った腹にしか愛着が無く、私の人格や個性、意思に全く興味が無かったからだ。

私は、彼らが興味を示さないそれらも含めて、自身の全てを受け入れられることを望んでいた。だから、抵抗力の無い子供になら、押し付ける事が可能と考えたのである。

上記のように、若い体に執着しているわけではないので、老年の男に惹かれ、ついていった事がある。

しかし結果は散々であった。酒をしこたま飲まされ、滅茶苦茶に酔わされて犯されたのだ。人によっては和姦と言うだろうが、私には強姦であった。自分もかつて、同じ事をしていた事を棚に上げ、私は酷く傷つき、屈辱を感じた。

このような感覚は、同じゲイの人間にも理解し難いらしい。我々ゲイの恋愛は、体の関係から始める者が多いのである。

私は、自分が恋人を求めているわけではない気がしている。おそらく母親を求めているのだ。性癖が男に向いているので、男に母性を求めるようになったのだろう。

大学を卒業した私は、高校教師の職を得て郷里の熊本に帰った。東京への憧れはかなり薄れており、東京の華やかな世界に進出する自信も気力も失っており、身寄りの無い場所での生活に心細さを感じてもいた。せめて身内が大勢住む場所で暮らしていこうと考えたのだった。

しかし私の冷淡さは、身内にも同様であり、貧窮する彼らを助けようなどとは微塵も思わず、こんな至らぬ身内を持つ自らのみを、憐れんでばかりいた。

ある時、実母が僅かばかりの金を借りに来た事があり、私は彼女を罵り追い返した事がある。母が大人しく、哀しそうに帰って行く後姿を見ながら胸が痛んだが、気が変わるほどではなかった

。今思えば私は母に甘えたかったのだと思う。産まれてから叔母に預けて、私を放っておいた事を根強く恨んでおり、恨み言を吐き出して、受け入れてほしかった。

そして金を借りに来た事に、私は逆に母が私に甘えていると感じて反発を感じた。

母の夫（私の義父）は没落し、寝たきりになった後、先立った。母は娼館の客引きをやりながら、甥や姪達を養っていた。

私は育ての親である、叔母と暮らしていたが、彼女が80を過ぎた頃、母は快く彼女を引き取り手厚い看護をした。私は育ての母親にすら冷淡だったからだ。

私の中には、一人のヒステリーに苦しむ女が隠れ住んでいる。そいつは半狂乱で暴れながら、親、兄弟、姉妹への憎悪を叫び続けている。その女を誰かに許容してほしかったが、そんな相手が居るはずもなく、私は一人抱え込み、その女に生涯悩まされ続けた。

私はその女を小説に吐き出そうとした。気は紛れたが、女は消えない。相変わらず私の心に居座り続ける。

その小説「現」は地元の同人雑誌に載るようになり、私は恐る恐るその雑誌を永井さんに送った。文学青年等があまり好きではない永井さんに、自分の書いた小説を送ったりしても好感を持たれるどころか、逆効果ではないかと怖かったが、何でもいいから永井さんと再び繋がりを持つきっかけが欲しかったのだ。

期待しないよう、自分を戒めていたが、とても好意的な手紙が永井さんから送られて来た時は泣く程嬉しかった。なのですぐ返事を書き、地元の名産ザボンを箱詰めで送った。返礼が来て、上京する機会があれば是非連絡してほしいとも書かれていた。

身内のちょっとした用事で上京する事となった私は、永井さんに連絡して昼食を共にした。会いに行くため、ご自宅にもお邪魔したが、既に妻子持ちとなった永井さんの住むそこは、非常に華

やかな洋風の館であった。細君も紹介されたが、ぱっと見でしかなかったが、非常に仲が良い。

会話上手な永井さんとの再会は、相変わらず楽しいものであったが、妻子持ちとなり、世間の許容する世界の住人の仲間入りを永井さんが遂げた事で、私は勝手に疎外感や孤独を感じ、「君も結婚してはどうか、自分の子供はそれは可愛いものだよ。」などと言われた時は、世間のはみ出し者として見下され、馬鹿にされた気がした。

それでも別れ際、新作ができたらまた送って見せてほしい、上京する際も是非れんらくしてくれと言ってくれたので、被害妄想が燻りつつも隠蔽する事ができた。

その後も私は、「現」の連載されている雑誌を熱心に、手紙と一緒に送り続け、永井さんは必ず返事を返してくれた。しかし永井さんが私に手紙を送るのは、いつも返事であり、永井さんから送られてきた事は一度も無かった。

いや、一度だけ例外がある。その頃永井さんはボディービルを始め、体を鍛え始めており、写真集まで出していた。その写真集を友人らに送り付けたりしていたそうだが、私もその一人であった。永井さんにしてみれば、赤の他人でも、何者でもいいので、自分の裸体を見せつけたいとの思いからだったろう。しかし私の方では、初めて永井さんからのアプローチである。なんとか気を惹きたかった。私の好みではなかったのに、その裸体に全く魅力を感じることはなかったが、精一杯の卑しいほどのおべっかを返礼した。

そんな見え見えのおべっかだったのに、永井さんは気を良くして、さらに写真を送ってきた。

その数年後、永井さんは新たな執筆のため、神風連とやらを取材するために熊本県に来る事となり、再会した。

私が小説を連載している雑誌の主幹、町田さんに会う事が主な目的の一つで、町田さんは郷土史家として名の通った人であり、また神風連に人並み以上の情熱を持った人でもある。

二人は意気投合し、大層熱心に神風連について話していたが、私には難しすぎてさっぱりだったが、それでも腰巾着として付いて回った。

熊本の観光案内についても、事前に調べて来ている永井さんの方がよく知っており、逆に私が案

内される側となっていた。なにしろ、食事の美味しい所を尋ねられても分からないくらいである。

しかしそれでも、どの飲食店に入っても永井橋は歓迎され、様々な贈り物をされた。永井さんはそれを大切に鞆に収めていた。その中には、寿司屋の湯呑等もあり、私はそのようなものまで持って帰らなくてもと思ったが、くれた人の気持ちを大切にしたいのだから。私などは、物でも人にすらも、その利便性しか見えなかった。

ある時、永井さんに、熊本で有名な女のいるバーは無いかと尋ねられた。異性愛者を装う永井さんの、女のいるバーに来ていたという情報を流しておこうという作戦である。

しかしこの時は、ある高級クラブの名が浮かんた。そこには妹が勤めているのだ。ところがそこへ行くと、妹は既に辞めていた。

私はその事を知らずにいたという、その兄弟・姉妹への冷淡さに、永井さんはかなり驚いていた。

せめてできた事と言えれば床の相手くらいだが、これも十分にこなせたとは言い難い。性欲処理ぐらいはできたはずだが、私に夢中になるというようなものではなかったはずである。

そもそも私も永井さんも、互いに好みではなかった。まだ私が大学生の頃、永井さんがかつて恋をしてふられたので、たいそう落ち込んだ事のある青年を見かけた事がある。がっしりとした、柔道でもやっていそうな体育会系の体と顔で、やんちゃで快活そうな好青年であった。それは同時に私の好みでもあり、私と永井さんの好みは似通っていた。

ある夜、永井さんと繁華街を歩いていると、Kという私の知人が声をかけてきた。Kは妻子持ちの、ノンケを装うバイセクシャルであり、私はその夜初めて聞いたのだが「永井さんの大ファンなんです。」と言っていた。

文学青年というものをあまり好かない永井さんだが、Kの事はかなり気に入った。Kも相当な社交家で、発言に嫌味を感じないからだろう。

バーからバーへと、3人で飲み歩いた。永井さんの泊まるホテルで別れる時、Kは子供みたいに別

れを嫌がり、駄々をこね、私に引きはがされて泣きながら帰宅した。

演技なのか本当なのか、いや本当なのだ。Kはそういう奴である。しかしこの時の悲しみを引きずる事はないだろう。帰宅する頃にはすっかり立ち直っている。Kは目の前に居る人間を本気で愛する。それは確かに愛であり、その愛は永遠のものだが、情熱の方はすぐに別れた人間から離れ、その時目の前に居る者へ注がれるのである。

この愛し方は、永井さんと似ているのかもしれない。私は羨ましかった。このように生きられればどんなに人生、幸せだろうかと思う。

それはともかく、永井さんはすっかりご満悦で、この夜はとくに楽しかったとの事だった。

帰りの列車に乗る際、見送りの人達が来ていたが、Kもそのうちの一人であった。彼はスーツを着て正装しており、目が合うと軽く会釈するという、遠くから見送る形であったが、永井さんはそれを確認でき、嬉しそうであった。Kは相手の抱える事情に配慮できる人であったので、「昨夜はどうも」などと言わなかった。そして仲間内ですら、誰にも永井さんと飲み歩いたと漏らした事は無い。

それから数か月後、私は「現」の連載を終え、これを何とか本として残したいと考えていた。そこで大作家である永井さんに、どんな出版社でもいいので口をきいてほしいと申し込んだのだが、返事は芳しくなかった。私を傷つけないよう、言葉を選んでの返事であったが、「現」に本として出すほどの魅力を感じない事が要因と思われた。

これを書いている今なら、それがよく分かる。なぜならその小説「現」は言わば恨みの書であった。主に実母への恨みつらみを吐き出しているだけの作品であり、それは私を苦しめるヒステリーに苦しむ狂女を表すかのようで、書いた本人ですら読み返して不愉快になるような作品であり、こんなものはタダでも読みたくないとすら思った。

しかしこの時の私には、それが分からなかった。隠し持つヒステリー女を抑え込む事に疲れを感じ始めていたせいかもしれない。

その頃同居していた母は、永井さんの反応を知り「永井さんは林芙美子を嫌いと言ってたような人だから、上品な育ちのためか庶民的な作風を嫌うのだろう」と気を使い、私を慰めた。

私の好きな林芙美子と同等に並べるような言い方をされたので、それは私にとって大いに慰めとなったが、自分への恨みつらみを並べ立てるような作品に対して、よく母はそのように言えたものである。

母の寛容さを思うと同時に、自分の被害者意識の強さに我ながら呆れる。

ある時の永井さんからの返事に、細君が自分への手紙を勝手に開いて見る事になったので、自分や永井さんの男色を匂わせるような事は書かないでほしいとの内容があった。しかし同性愛内容の作品を書いた場合は、細君も気にしないので、気にせず送ってくれとの事だった。

何でもない普通の手紙である。しかしあの頃の私は、かなりおかしくなっていた。辛うじて、家の外では普通の教員を通していたが、家の中では襖をけたたましく開け閉めしたり、何かの入った箱をひっくり返したりしては同居する母を罵った。

抑え込んでいた狂女を、とうとう抑えきれず外に溢れ出してしまったのだ。

母はそんな私を、度々ごとに宥めていた。まるで泣きわめく赤子をあやすようである。

そんな半分くらいキチガイであったため、普通の手紙も普通に読めず、「もう手紙を送らないでほしい」と読解した。

今から考えれば永井さんも、やっかいな人物に関わったものである。私は「関係を持った中なのに、出版社との中を取り持ち、本を出版させてくれない」「いきなり拒絶された」「理不尽にも捨てられた」「馬鹿にされた」という風な、何の根拠もない被害妄想を膨らませ、逆恨みの感情を抱いた。

そしてそれ以降、永井さんに手紙も小説も送っていないので、当然永井さんから返事は来ない。いつもの事なのに、私はそれを「永井さんが私に怒りを抱いているから」とこれまた被害妄想にとり憑かれ、一人悩んでいた。永井さんが私に怒りを抱くような事は何も無かったというのに。

「現」の次に同雑誌で連載した「夜空」には、そんな狂気じみた憎悪が込められている。



きっかけは、林芙美子の放浪記のような作品を連載しようかというものであった。大学に行くため上京した時からの、私の実体験をそのまま書いた作品である。

そして当然、名前は皆変えてあるが、永井さんも登場する。関係を持った事も。私はそれを永井さんへの復讐のつもりで書いていたが、今冷静になって考えてみれば、永井さん以外が読んでも誰の事か分からないだろうし、もし永井さんが読んでいたとしても、そう考えて心配する事は無かっただろう。ましてや熊本の地方雑誌を永井さんが購入しているわけがなかった。

「夜空」の連載中、町田さんや関係者と飲み屋で宴会をした時の事であった。

町田さんは「福次郎君、あの夜空って作品、連載はまだ続くの？」とフランクに尋ねてきた。

「はあ、まだ...。」と陰気で歯切れの悪い返答をすると、

「もうそろそろ終わりにしようよ、あんなもの。実は読者から苦情が来てるんだ。子どもに見せられないとか、うちの病院の待合室には恥ずかしくて置いておけない、とか」

「夜空」にはかなり濃い性描写、それも同性間によるものが書かれていたのでそのためだろうと思われる。しかし、町田さんの「あんなもの」という言葉に私の脆い自尊心は容易に傷つけられ、いい歳をした大の男が涙を堪えきれず、洗面所に駆け込んだ。

顔を洗って戻ると、町田さんは私が洗面所で何をしてきたか当然察していたので、それ以降この件について口にする事は無かった。

私はこの件について、「同性愛差別によって、作品が認められなかった」と自分を慰めた。実際は、その頃ノンケの作家が同性愛を書く事は珍しくなかったのだが、またもや私は、自分の性癖に責任転嫁したのである。

永井さんとの交流が絶えたまま、永井さんは自衛隊に体験入隊したり、青年を数名集めて小軍隊のような、なんとかの会というものを結成。自衛隊駐屯地にて、私にはよく分からない演説をした後に割腹自殺した。

かつて書生であった私の元に記者が来た時、私は「なぜこんな事をしたのです、自分がつまらない人間だと思ったなら、素直に認めてしまえば良かったのに。」と発言したが、それは正に私自身への叫びであった。こんな、相手が故人となった時ですら私は自分の事しか見えないらしい。

そして、まだまだ頭のおかしかった私は、永井さんが死を選んだのは私が永井さんとの事を、名前を変えたとはいえ小説に書いたせいだと、長い間思い込んでいた。いや、そう思いたかったのだとも思う。永井さんにそれだけ強い影響を持っていたのだと。

何も無いからっぽの私は、文学でも認められる事が無かった。

一度「タオル」という小説で芥川賞の候補にノミネートされた事がある。所謂ホンモノにしか分からぬような性描写を描き、その作品がノミネートされた事で私の性癖は周知のものとなったが、これは一つの賭けであった。性癖を暴露し、社会的地位を失うか、芥川賞を受賞してそれを覆い隠すほどの社会的地位を得るか。

しかし結局、「タオル」はノミネートされ、冷やかされただけに終わり、受賞には至らなかった。

やけになった私は、ならばせめて永井橋という天才に愛された男として、世間に名を知らしめたかった。そこで、「告白～永井橋」という暴露本を出版したのである。

事実をそのまま書けば、私が愛されている感じが無いため、願望でかなり変えてある。

自分をつまらない人間と確信しても、なぜそれを素直に認められよう？

しかし、永井さんが「次郎」という名で書いた卑しい男を、私の事を書いていると感じた事だけは、今でも当たっている気がしている。

永井さんの死後、私は永井さんからの手紙を全て売り、金に換えた。私の卑しさを見抜き、悪意無く参考にしたのかもしれない。

永井さんについての暴露本を出してから数年後、弟の太郎が死んだ。路上で野垂れ死んでいるのを警察に発見され、身内の私が確認のために呼ばれたのだ。

太郎はただの男色家ではなく、女装愛好家でもあった。この頃は老年にさしかかっており、その姿はまるで化け物である。

太郎はあるノンケのホストに入れ込んでおり、貢まくっていた。傍から見れば騙されているのが一目瞭然であったが、恋は盲目なのか太郎は最後まで、都合よく踊らされていた。

太郎の死に、私は何も感じなかった。強いて言えば、自分ならこいつよりはマシな死に方ができそうだと暗い優越感を感じてすらいた。そして、そんな自分を恥じたので、弟について書いた小説には、太郎が死んで悲しかったと書いておいた。

弟のように、無邪気に人を愛し、あからさまに夢中になれば、付け込まれて利用されるだけだ。そう考え、私は太郎の二の舞にはなるまいと考えていた。

しかしこの歳になって思う。私の方が比べものにならないほど惨めであったと。

書記はここで終わっている。